

## 『ニーベルンゲンの歌』と伝承 (1)

岩井方男

§ 1 『ニーベルンゲンの歌』の冒頭詩節には、「昔の物語をいま物語る」という内容がある。作品を支配する時間意識について、既にいくつかの特徴を指摘したが、その流れの中で、本論文では「昔の物語」を取り上げる。

この作品本来の期待される享受者たらんとするには、「昔の物語」に関する知識を文学共同体の他の成員と共有していなければならなかった<sup>(1)</sup>。それでは、彼らにとり「昔の物語」の内容は何であったのか。例えばアッティラの死にまつわる出来事が、いきなり文学共同体の宮廷人たちの昔の物語となったとは考えにくい。したがって、ある事件が文学共同体にとり「語り継ぐに値する過去」となり、「共同体構成員に無縁ではない」<sup>(2)</sup>過去となる過程を瞥見しておくことは、『ニーベルンゲンの歌』研究に必須である。

「昔の物語」の内容には二種類ある。一つは、この叙事詩の成立に直接かわる「昔の物語」であり、もう一つはこの作品の享受を可能たらしめる一般的な文学史的素養である。無論『ニーベルンゲンの歌』研究のためにはまず前者の検討が主になる。しかし文学共同体が所有していた後者の知識（いわば作品の外側の知識）も決して無視できない。なぜならそれにより、この叙事詩の位置付けが文学共同体に可能になるからである。

直接的な「昔の物語」には口承も存在したに違いない。しかし現存するのは文書のみである。後に示すとおり歴史と文学との区別は時に曖昧であるが、現存文書を史書と文学作品とに分類し、まず前者の記述の紹介から出発する。

## 1. 歴史上の事件と史書

§ 2 英雄伝説の特徴は歴史との密接な関係である。従来、多くの研究者がニーベルンゲン伝説の歴史的側面に魅せられ、伝説を歴史上の特定の事件と結びつけようとする試みは、かなり頻繁になされてきた。頻繁になされてきた理由は極めて単純であり、そのような試みのほとんどが失敗してきたからである。失敗の理由は二つ考えられる。第一番目は歴史と文学は別物、というこれまた極めて単純な理由である。

東ゴート族アマール家のテオドリク Theodoricus (456年? - 526年) はコンスタンティノーブルにおける人質生活を終え、長途パンノニアに帰り自らの部族の王となった。<sup>(3)</sup> 彼は東ローマ帝国やフン族と友好関係を結び、当時イタリアの支配者であったオドアケルと戦う。一時はテオドリクが劣勢であった。しかし策略をもってオドアケルおよび彼の家族を殺し、その地を支配する。彼はゴート族とローマ人との融和を試みるものの、おそらく宗教的理由からそれに失敗した。カトリック弾圧が人びとの反発を招いたのである。それにもかかわらず在任中、彼の支配は大きな破綻を来さず、イタリアに久しぶりに平和が戻る。テオドリクは、たとえ一時的であったにせよ、民族移動の混乱期に安定勢力を作り出した。彼の存在の大きさは、「大王」という美称に如実に現れている。一方、ゲルマン人の英雄伝説には、テオドリクと同じ名前を持つ人物（各方言により形態は異なる）が、しばしば登場する。この人物は各地を放浪し、敵を尋常ならざる手段で倒し、最後に地獄に堕ちる。たしかにいくつかの点に限定すれば、彼とテオドリク大王の間には関連が見いだされる。しかし、伝説中の人物と歴史上の人物は完全には重ならないし、また重なるはずもない。

東ゴート王テオドリクの生涯には、伝説化・文学化されなかった部分が存在する。例えば、彼の政治的手腕やローマ化したゲルマン人という側面は、歴史の上では大きな意味を持つが<sup>(4)</sup>、それは伝説に直接的に反映していない。また、テオドリクに類似した生涯を送っていながら、伝説に名を残していない（少なくとも現在にその伝説が残っていない）人物も多い。ヴァンダル族のゲ

イセリク（ガイセリク）は、アフリカにおいてテオドリクのそれにも劣らない強大な王国を築いた。それにもかかわらず、私の知るかぎり、彼は伝説においてテオドリクと同等の扱いは受けていない。長期間各地を転戦した王、敵を卑怯な手段で倒した王は枚挙の暇もないし、カトリック教会を弾圧したアリウス派の信者は、民族移動期のみならず、他の時代にも多数存在したはずである。しかし、このような人物の名のほとんどが忘れられてしまった。英雄伝説に残る人物の名前は、極めて限られている。もし、歴史上の人物の等身大（あるいは等身大に近い）姿が伝説に残り、歴史上顕著な人物の数だけ伝説が存在すれば、歴史と伝説ないし文学作品との間には直接の関係があるといえよう。しかし、実際はそうではない<sup>(6)</sup>。この事実こそ、文学と歴史の安易な比較対照の危険性を証明している。

上記が、文学作品に歴史的根拠を求める試みの本質に内在する問題点であるとすれば、失敗の第二の理由は、方法にひそむ難点である。『ニーベルンゲンの歌』の歴史的背景を探るため、モデルとなる歴史上の人物や事件から伝説が直接生じたと想像し、そこから生じた伝説の展開過程を再構成しようとした研究もあった。再構成が仮に成功したとしよう。しかしこのような研究に、いかにほどの意味が存するであろうか。物語中の人物なり事件に類似する存在をモデルとして最初に選んでおいたのであるから、再構成された伝説の展開過程にいくらか整合性があったとしても整合して当然である。またこの方法から、恣意の完全な排除は不可能であろう。

繰り返すまでもないが、歴史と文学とは異なる。これを確認した上で、『ニーベルンゲンの歌』の歴史的部分、すなわち、歴史上のブルグント族に関する歴史、アッティラに関する歴史、および二人の女王の争いに関する歴史を史書に従って紹介する。

§ 3 他のゲルマン諸部族と同様、ブルグント族の起源は明らかではない。考古学的には、彼らとバルト海の小島ボルンホルム Bornholm 島（現デンマーク

領)との関連が論じられている。紀元前二百年頃、この部族は大陸のオーデル河の河口域に移住、消長および他のゲルマン人諸部族との接触を繰り返したらしい。私の知るかぎりでは、プリーニウスの『博物誌』(Naturalis historia. 4,99)において、ブルグント族は初めて(一世紀後半)文書に登場する。二世紀半ばのプトレマイオスによる『地理』(Γεωγραφία. 2, 11, 8f, 3, 5, 8.)に、彼らは *Bουργόντων* あるいは *Φρουγουνδίωνες* として姿を現す。後者は南下したブルグント族の分派であろう。この記述に関する議論は多数であろうが、とにかくこの段階においては、彼らの存在は博物学的関心の対象でしかなく、歴史上の事件ではなかった。

いわゆるゲルマン民族の移動の時代<sup>(6)</sup>になると、ブルグント族はエルベ河の東に一時定住するが、東からゲピド族に追われて西に進む。四世紀にはメイン河周辺にいたが、やがてライン河を右岸から左岸へ渡った。彼らの定住地はおそらくライン中流域であり、そこに王国(部族国家)を築いた。けれどもウォルムスがその中心であったという確証はない。この時代になると、ブルグント族は西ローマ帝国と直接の利害衝突を起こす。ただし他のゲルマン諸部族と比較すると、彼らと帝国との関係は良好の部類に属す。両者は同盟して、共同の敵であるアレマン族と戦った。これ以後の歴史はニーベルンゲン伝説と関連があるので、目に付く資料をいくつか紹介する。

四世紀後半のブルグント族については、アンミアヌス・マルケリヌス Ammianus Marcellinus (330年?-395年以後、以下「アンミアヌス」と略称)が報告を残している。「(ブルグント族は)好戦的であり、力強い戦士たちが数多くいて、そしてそれゆえに境を接する周囲すべてに恐れられている」(Ammianus 28. 5, 9).<sup>(7)</sup> この部分は、ゲルマン人諸部族を紹介する際のタキトゥスを思い起こさせる。おそらく、これはローマ人による北方の蛮族記述のトボスであろう。その意味で、この部分からは実質的内容がほとんど何も伝わらないが、アレマン族と比べればローマ帝国に友好的であるにせよ、ブルグント族は決して平和愛好家ではなかったことだけは分かる。ただし、これに続く数

節の記述に基づくかぎり、平和が破られる原因はローマの側にあった場合が多い。

興味深いのは、ブルグント族の支配者についての記述である。王は同時に複数存在したらしい (28. 5. 10f. に *reges* の記述)。ただし複数の王の存在が恒常的であったか否かは不明である。また彼らの王は *Hendinos* と称され、最高聖職者は *Sinistus* と称された。後者の地位は揺らぐことはないが、前者は、戦況が思わしくなかったり、農作物が不作であったりすると廃位されるという (Ammianus 28. 5. 14)。このような王の姿は目新しくない。アンミアヌス自身が述べているとおり、エジプトの支配者たちはそのような処遇を受けていたのであろうし、また同時に、『金枝篇』に登場する祭祀王たちを思い出させる。ただし管見によれば、アンミアヌスの念頭には、軍の先頭に立ち自ら戦うゲルマン人の王たちの姿があったはずである。ブルグント族の王たちは、他の部族の王たちと同様、自らの位と命を賭けて戦ったに違いない。しかしそうであれば、ブルグント族の *Hendinos* は、むしろタキトゥスが『ゲルマニア』第七章において述べているところの *dux* (*Reges ex nobilitate, duces es virtute sumunt*) に近いのではないだろうか。

戦況によっては、当然 *dux* たちも落命することもあったろう。後述のブルグント族の諸王も、このようにして戦死したと思われる。

§ 4 ローマ帝国とブルグント族のごとく彼我の差が余りにも大きい場合は、その友好関係が永続的であるはずがない。彼らの間ではしばしば利害の対立があったが、とりわけ435年のそれは深刻であった。ブルグント族はこの年に定住地に隣接するベルギカの地に侵入し、ローマの將軍アエティウス *Aetius* に撃退される。当初は平和条約が結ばれたが、その翌436年、このローマの將軍は同盟者であるフン族の助けを借りて、ブルグント族に壊滅的な打撃を与えた。

同時代人であるプロスペルス *Prosperus Tiro* (400年? - 463年) は、この事件をいともあっさりと報告している。『年代記』においてアフリカにおけるヴァ

ンダル族の動向を記した後に、「同じ頃、ガリアの地に住んでいたブルグント族の王グンディハリ Gundiharius を、アエティウスは戦によって打ち負かし、嘆願する彼に平和を与えた。彼はその平和を長期間享受するわけにはいかなかった。彼をその民もろとも、フン族が根こそぎ滅ぼしたからである。」

この事件に関して、カッシオドールス Cassiodorus (487年? - 583年?) もほぼ同様の内容と言文で記述している。<sup>(8)</sup> 両人の著作に同様の内容が記されているゆえに内容が事実である、という保証はもちろん存在しない。むしろ、カッシオドールスがプロスペルスを引用した、と判断すべきであろう。この事件の知らせは遠方にも伝わった。スペインのヒュダティウス Hydatius (? - 468年以後) も同時代人であるが、彼の年代記の436年と437年の項には、「蜂起したブルグント族は、ローマの将軍アエティウスにより打ち負かされる」、「ナルボンヌは包囲から将軍にして司令官アエティウスにより解放される。ブルグント族の二万人が殺された」とある。<sup>(9)</sup> この記述の後半部は唐突であるが、おそらく、アエティウスとの連想でこの蛮族の悲運に言及があったものと思われる。ただし、「二万人」という数字の出所は不明である。また別の年代記には、つぎのように記されている。「ブルグント族に対する大きな戦いが起こり、その戦いにおいて、この部族は王と共にほぼすべて、アエティウスにより滅ぼされた。」<sup>(10)</sup>

五世紀の歴史家ないし歴史書は、記述はさまざまであるが、内容に極めて乏しい。たしかにブルグント族が大敗を喫したことは分かるが、それ以外は曖昧のままに残されている。おそらくここから、ブルグント族に対する当時の知識人の態度の一端を理解すべきなのであろう。彼らにとって一介の蛮族の運命など、関心の外にあったに違いない。

ただし、これまた同時代人であるガリアの貴族シドニウス C. Sollius Apollinaris Sidonius (430年? - 480年?)<sup>(11)</sup> になると、事情は少々異なる。彼も上記の事件については、ほんの少ししか触れていない。まず、アエティウスはスキタイ (= フン) 人の戦いから学ぶところがあったと述べ、それから「残

忍なブルグント族が圧迫していたベルギカ族を解放した」と記すのみである (Sidonius VII V.234f). ブルグント族の命運を賭けた戦いが、彼の口吻によると、あたかもローマの将軍と蛮族の王との間の私闘であるかのごとき印象さえ与えかねない。しかし、後にシドニウスはこの蛮族と親しく接する。かつての同盟者であったローマ軍とフン族は、451年に現在のシャロン Chalons-sur-Marne 近郊で戦った (カタラウヌムの戦い)。この戦いには数多くのゲルマン部族も参加し、同一部族も敵味方に分かれて戦った。<sup>(12)</sup> この戦いに、先の戦いで生き残った (プロスペルスによると全滅したはずであった) ブルグント族も参加したが、ここでもまた彼らは大きな打撃を受けてしまう。いくたびかの試練を受けたブルグント族は、ジュネーヴを中心に新しい王国を建設した (456年)。やがて彼らは、国の中心地を南フランスに移した。四百五十年代の末の騒動で、ガロ＝ローマ貴族たちはブルグント族を受け入れ、このときシドニウスはブルグント族と直接交流するはめに陥る。カタラウヌムの戦い以後、落魄し放浪を続けたブルグント族の様子は、シドニウスの有名な詩から偲ぶことができる。下の詩はニンニクとタマネギの臭気 (V.14) に閉口しながらも、この貴族が460年前後 (諸説ある) に詠じたものである。

[なぜあなたは私に命ずるのか、  
私といえば] 髪をのばし放題にした放浪者の群に交じり、  
ゲルマンの言葉に耐え、  
饅えたバターを蓬髪に塗りたくった  
大食いのブルグント人が歌う陰鬱な代物を  
しかめ面をしてときおり褒め称えているしまつた。

(Sidonius VII V.3ff.)

ニーベルンゲン伝説を学ぶ者には、この詩の文学的価値よりも、食事中的ブルグント族による歌の内容に重大な関心を寄せざるをえない。おそらくシドニ

ウスにとっては駄舌にすぎなかったであろうが、ここではブルグント族の悲運または彼らの英雄の事績が歌われた可能性が高い。<sup>(13)</sup>

この後もブルグント族の受難は続くが、彼らはここで最後の輝きを示す。他の有力な部族とは異なり、ブルグント族は固有の歴史家を持ってなかった。その意味において、彼らの歴史に触れている六世紀初頭の「ブルグント法」*Lex Burgundionum*の存在は貴重である。そこにおいては先に名を挙げたGundichariusがGundahariusと名を変えて、他の王と共に記されている（... id est: Gibicam, Gundomarem, Gislaharium, Gundaharium, ...）<sup>(14)</sup>。五世紀末から六世紀初頭にかけて、ブルグント王族兄弟の間に激しい争いが起きたが、最終的にグンドバドGundobadusが王位についた。彼はすぐれた人物であったかもしれないが、時代が悪かった。テオドリク（大王）を戴く東ゴート族とクロドヴェクChlodovechus（クロヴィス）がまとめ上げた新興のフランク族の間に挟まれたブルグント族の運命は、両国の都合により翻弄される。先述のグンドバドたちの兄弟間の争いにはクロドヴェクが干渉し、彼の息子テオドリクはブルグント族の土地を占領した（*Gregorius II, 32; 37*）<sup>(15)</sup>。またグンドバドに父を殺されたブルグント王族の娘はクロドヴェクの妻となり、息子たちを扇動してブルグント族に攻撃をしかけてグンドバドの息子たちを打ち破った（*Gregorius III, 6*）。このようにして、次第にブルグント族はフランク族の支配下に置かれるようになる。これ以後の彼らの歴史はニーベルンゲン伝説と関係がなくなり、伝説の主役はフランク族に移ってしまう。しかしこの部族の歴史を語る前に、ブルグント族とほぼ同時代に歴史を彩ったフン族について触れておかねばなるまい。

§ 5 フン族の王アッティラの死は、『ニーベルンゲンの歌』とは直接の関係はない。しかしそれはニーベルンゲン伝説を経由して叙事詩に影響を及ぼしているので、簡単に触れておく。彼の死については多くの歴史家が語っているが、その実像に触れた人物による証言はあまり残っていないようである。その貴重な例外がプリスコス（410/20年－480年?）であり、彼は東ローマ帝国の使節団



の一員として、実際にアッティラに会っている。

彼の著作から、アッティラの父がΡούαと称しΒλήδαという兄弟がいて、妻Κρέκαとの間に三人の息子がいたことが分かるが、最も有名な部分は、フン族の王に謁見を求めるための旅の記録である。彼の著作は断片的であるゆえに明確にそれとは分かりにくい。旅行中、見聞を重ねるうちに、アッティラおよびスキタイ人<sup>(16)</sup>に対する彼の認識はだいぶ変化しつらしい。西ローマ使節との接触や、スキタイ人の中で暮らす(西)ローマ人の話をとおして、プリスコスの「文明」に対する疑念は強まる。アッティラの宴会の席上、自分を含めた客たちが豪華に装い金銀の食器を用いているのに対し、質素な身なりのフン族の王が木製の食器から食べるのを見て、東ローマの知識人はある種の感動すら覚えるのであった(Priscos: S. 204f.)。プリスコスの語り口は(それが装われたのか否かは別として)冷静かつ客観的、むしろ即物的でありさえする。彼がアッティラの宴席に連なったのは449(8?)年である。それからしばらくしてアッティラは西ヨーロッパを転戦し(例えば451年のカタラウヌムの戦い)、突然死亡する(453年)。この事件について、最も信頼できる情報を与えてくれるのはこのプリスコスを措いて存在しないが、彼の著作のその部分は失われており、残念ながら百年ほど後のヨルダネスJordanes(6世紀)による引用しか残されていない。

歴史家プリスクス[プリスコス]の記述によると、死ぬ間際にIldicoという名の極めて美しい乙女をめとり、彼の部族の習慣に従い数多くいた妻たちの中に加えた。婚礼の席上、彼は非常に陽気に開放的になり、酒と眠りの力で体に力が入らず横たわり血を吐いた。通常は鼻から血が流れ出すのであるが、流れが堰き止められて喉に血が詰まって死んだ。このようにして、戦いで栄光に満ちた王も泥酔のために恥ずべき死を遂げたのである。翌日、時もだいぶ経ってから、王の従者たちが少し心配になり、大声を上げてから、扉を打ち破った。何の傷もなく血が流れ出してしまったアッティラの亡骸と、

泣きながらベールに顔を隠していた乙女を、彼らは見いだした。

(Iordanis XLVIII f. (453))

この後にはアッティラの葬儀の場面が続き、それ自体極めて興味深い、ニーベルンゲン伝説とは関係ない。ただし、フン族の王の死は不自然ではあるものの、ヨルダーネス（すなわちプリスコス）は、それが乙女の責任であると述べていない点には注意すべきである。この時点では、殺人者は存在しなかった。ちなみに上記引用箇所におけるヨルダーネスの文体は、プリスコスのその面影をよく残しているように思われ、それだけに信を置くに十分値する。<sup>(17)</sup>

一方プロスペルスは、アッティラの死の後に起こった息子たちの争いにむしろ興味を覚えたらしく、彼の死自体は単なる事件として片づけている。おそらくプロスペルスを模しているのであろうが、カッシオドールスもフン族の王の死には冷淡である。<sup>(18)</sup>しかし、マルケリヌス Marcellinus comes（五世紀末から六世紀）<sup>(19)</sup>の口調は上記の諸家とは全く異なり、センセーショナルですらある。

フン族の王にしてヨーロッパと属州の略奪者は、夜、女の手になる刃物により刺し殺された。

(Marcellinus 454)

マルケリヌスはこれに続けて、吐血死因説も挙げている。したがって、彼はプリスコスまたはその意見に同調する人びとの存在を知っているはずであるが、その説は紹介にとどめられている。もちろん本論文は、両説の正しさを論じる場ではない。しかし、殺害者を女性であるとしたマルケリヌスの説のほうが、物語性に富んでいることは確かである。

この後、私の調べたかぎりでは、アッティラの死に関する注目すべき記事はしばらく見当たらない。<sup>(20)</sup>しかし、アヴァール人の侵入に悩まされたカロリン

グ朝の時代になると、彼らとフン族とが混同されたためであろうか、蛮族の王の死にざまが再び取り上げられるようになる。いわゆるポエタ・サクソの年代記には、以下のごとき記述が見られる。<sup>(21)</sup>

多くの民に君臨した彼らの王アッティラは

女の手により地獄に堕ちた。

深い夜がすべてに休息を与えているとき

[...]

王妃は王を恐ろしい勇気を奮って殺した。

しかし、それは自分の父を殺された仇討ちであった。

(Poeta Saxo S.247)

事件から四百年ほど経った文書においては、殺害者である女性の行為に父の仇討ちという動機付けがなされている。十一世紀の『クヴェードリンブルク年代記』<sup>(22)</sup>になると、アッティラは父を殺された乙女に、マルケリヌスの記述と同様、小刀で刺されたことになった。

§ 6 古典古代における輝かしい歴史記述の伝統の掉尾を飾るのが、四世紀後半のアンミアヌスである。この軍人歴史家は、滅びることさえ許されず時代の流れの中でもがき苦しむ帝国の姿を、グロテスクな支配者と無知蒙昧な人民の姿をとおして描き切った。その意味で、アンミアヌスはタキトゥスの後継者であると言える。彼らの筆先には感傷などの入る余地はなく、事件は歴史家自身に知られるままに淡々とあるいは劇的に綴られていく。記述は歴史家の知りうる範囲に限定され、事件の裏に横たわる理由の推理などには積極的な価値が与えられていない。それゆえに、記述の全てが事実に即しているかのごとくに見える。しかしそれが事実であるという保証は、実はどこにも存在しない。カエサルが『ガリア戦記』において語り、タキトゥスがいささかの賛嘆の意を

込めて語ったゲルマン人たちの生活は、おそらく伝聞に基づくものであろう。アンミアヌスのもたらすブルグント族についての記述も、戦闘などの事件は別とすると、伝聞によるとしか考えられない。しかしそれにもかかわらず、傾聴する価値を十分有しているのではあるが。

古典著述家の系列にあるのが、シドニウスとプリスコスそして後者を引用するヨルダーネスである。シドニウスにとってブルグント族は、遠くにいれば関心を惹かないし、近くにいれば嫌悪の対象にしかすぎない。すなわち、彼らはこの貴族が真剣に取り上げるに値しない存在である。プリスコスはアッティラを間近に見た。しかし、いささかの共感を感じるものの、東ローマの文明人の目には、この歴史的人物も珍奇な獣のごとくにしか映らない。ヨルダーネスはゴート人であるが、古典的教養のなせる業であろうか、アッティラの死と（本論文では省略してあるが）彼の葬儀を、博物学的関心のもとに、蛮族の奇習としてとらえている。プロスペルヤカッシオドールスも、ブルグント族の大敗北を簡潔に冷淡に記している。しかし、彼らの記述には年代記という字数の上での制約があるので、その文体から彼らの心性を推し量ることは困難である。ところがヒュダティウスの場合には、同じ年代記作家であっても、歴史記述の新しい傾向を見て取ることができる。

その新しい傾向とは、古典的な論理性や整合性を越えた、むき出しで素朴で幼児のごとき好奇心である。私たちはスエトニウスの好奇心を知っている。この歴史家は、古典作家の常套手段である演説よりも、むしろゴシップを用いて皇帝たちの姿をありありと描き出す。彼の好奇心は、人物を描くという目的により正当化されよう。しかし、ヒュダティウスの好奇心には、そのような明確な目的がない。彼は自分の好奇心に導かれるままに、筆を走らせる。攻囲戦、多数の死者、アエティウス、ブルグント族の死者二万人。連想は連想を呼び、素っ気なくはあるが記述は膨らむ。マルケリヌスはヒュダティウスのごとき心性の持ち主である。ヨーロッパ中で恐れられたアッティラの、あまりにあっけない死に様は、彼らの好奇心を刺激するための格好の材料であったに違いない。

い。ヨルダネス（すなわちプリスコス）においてはフン族の王の傍らに待っていたにすぎぬ女が、マルケリヌスにおいては殺人者に「格上げ」されている。彼がヨルダネスに先行している点には注目すべきであろう。マルケリヌスの記述は、女の手によるアッティラ殺害という伝説がいかにも早く生じたかを暗示しているからである。そしてカロリング朝期になると、殺害の動機すら記録されるようになる。その前提となるが、ブルグント族の王とフン族の王の奇妙な邂逅である。

いわゆる助祭のパウルス Paulus Diaconus (720/30年 - 799年) は、カタラウスムの戦場について説明した後で、アッティラはガリアに侵入するやいなや、戦場にやってきたブルグント族の王グンディハリを打ち負かしたと述べる。<sup>(23)</sup> すなわち、先の戦いで死んだはずのブルグント族の王は、この助祭の残した歴史の中で二十数年後に生き返った。人びとの好奇心は、死者をもよみがえらせたのである。更に『クヴェードリンブルク年代記』においては、アッティラ殺害の凶器が細かく特定されているが、それも驚くには値しないのかもしれない。

ブルグント族とアッティラの出会いを眺めるために、あまりに急いでしまった。ブルグント族がフランク族の支配下に入り始めた頃にまで時間を戻す。

§ 7 『ニーベルンゲンの歌』中の重要な事件の一つである二人の女王の争いのモデルは、フランク人の歴史の中に求めるのが妥当であろう。<sup>(24)</sup> メロヴィング朝フランク王国の王妃ブルニキルド Brunichildis (613年没) およびフレデグンド Fredegundis (596/7年没) と、彼女たちの間に起こった多くの血なまぐさい事件は、メロヴィング朝の史家たちに大いなる灵感を与えた。両人にまつわる事件は改めて紹介する必要がないほど有名であるが、記述内容確認のため簡単に振り返る。まず同時代人であるグレゴリウスの『歴史十書』に基づき、争いの前半部を見直してみたい。<sup>(25)</sup>

彼の書物は天地創造から説き起こしているものの、第二書になると、フ

ランク人が舞台の中心に現れる。前出のクロドヴェクの死後、クロタカリ Chlothacharius (クロタル) が覇権を握ったが、彼には母の異なる多くの息子がおり、その中で父の遺産を分与されたのは四人であった。以後しばらくの間、腹違いの兄弟であるジギベルト Sigiberthus とキルペリク Chilpericus の争いが続く。グレゴリウスは両者をはっきりと描き分け、ジギベルトは折り目正しく情け深い人物 (例: clemens [Gregorius IV, 23]) であり、一方キルペリクはキリスト教徒の敵 (例: Nero nostri temporis et Herodes [VI, 46]) であり好色な奸物とされている。グレゴリウスは事件の当事者たちと会見しているので、この評は彼の率直な感想であろう。ただし、公平を保つためには、グレゴリウスが司教であったトゥールはジギベルトの所有する都市であり、キルペリクはかつて息子の一人に命じ、この都市を侵略させた (IV, 47) という事実を忘れてはなるまい。

ジギベルトは兄弟たちの女性に対する不品行を憂い、自分はスペインから西ゴート族の王の娘ブルニキルドをめぐらした (568年)。彼女は「優雅で魅力的な顔立ちで、举止端正で愛らしく、賢く雄弁な」(IV, 27) 乙女であり、このときカトリックに改宗する。これに対抗するかのごとく、キルペリクはブルニキルドの姉ガルスウィンタ Galusuintha をめぐらした。ところが、キルペリクはいまだ側女フレデグンドを愛していたので、二人の女の間には争いが絶えない。ガルスウィンタは夫を責めたが、彼はかえって妻を殺させ、フレデグンドを妻とした。

周知のとおりフランク王国では分割相続が慣習であり、以前からジギベルトとキルペリクの仲は悪かった。それに加えてブルニキルドとフレデグンドの二人の王妃の間も不仲になり、兄弟間の緊張は高まった。キルペリクがまず攻撃をしかけたが、ただちにジギベルトは反撃に移る。彼は優勢に戦いを進め、キルペリクをある都市に追いつめた。一人の司教がジギベルトに警告するが、彼はそれを聞き入れず攻撃の手を緩めない。しかし、ジギベルトがフレデグンドから差し向けられた刺客<sup>(26)</sup>により暗殺されると、形勢は逆転した。これは

575年のことであり、王は四十歳であった。以後キルペリクはブルニキルドの財産を没収し (V, 18) 非道を重ねるが、それには王妃フレデグンドの教唆によるものも少なくなかった。例えば先妻の息子メロヴェク Merovechus はブルニキルドと結婚したゆえに父王から嫌疑を向けられ殺されるが、そこにフレデグンドの意向が働いていたことは明らかである (V, 18)。しかし、かのキルペリクも584年に暗殺されてしまった。

彼の死後、実権は三人目の兄弟グントクラム Gunthchramnus (または「グントラム」) の手に移り、フレデグンドはある荘園へと逼塞させられる。彼女はいくたびかブルニキルドとその息子を暗殺するための刺客を送るが、もはや彼女の時代は終わっていた。しかしこれで、ブルニキルドの地位が安泰になったわけではない。故ジギベルト王の遺産にグントクラム王が関心を持ったからである。未亡人は、故王との間になした息子キルデベルト Childeberthus (二世) を擁し、難局に立ち向かう。王とはいえ、息子は母の圧倒的影響下にあっただけで、事態が微妙になり若い王の手に余ると、「キルデベルト王ならびにその母が」 Childeberthus rex et mater (IX, 16) 登場した。この箇所において、彼女の存在の大きさは明らかである。またある条約の中では、「最も卓越せる主君であらせられるグントクラム王陛下とキルデベルト王陛下、ならびに最も名高き女主人であられるブルニキルド女王陛下」 *praecellentissimi domni Guntchramnus et Childebertus vel gloriosissima domna Brunehildis regina* (IX, 20) と記されている。彼女を修飾する大仰な形容詞に目を奪われる必要はないが、注目すべきは、彼女が他の二人の王たちと同格である点である。

これ以後も、フレデグンドはブルニキルドたちを暗殺しようとする試みを止めないが、グレゴリウスは二人の王妃の争いの結末を伝えていない。彼は決着がつく前に、おそらく死んでしまったからである。以後は、残念ながら歴史としての質に問題がある、偽フレデガリウスの『年代記』と無名氏による『フランク族史書』に従う。<sup>(27)</sup>

宿敵フレデグンドの死 (自然死であつたらしい) の後も、ブルニキルドの戦

いは続く。彼女を待ち受けていたのは、貴族たちの反乱である。この時代はそれ以前にも増して混乱し、人びとの離合集散が激しかった。にもかかわらず、彼女は持ち前の不撓不屈の努力により、息子・孫・曾孫のために三十五年間君臨し続けた。しかし彼女のやり方はあまりに残酷であり、多くの人びとの恨みを買ってしまう。その間に、キルペリクの息子であるクロタリ Chlotharius は味方を集める。その中には、来るべき時代を拓くアルヌルフやピピンの名も見える。ちなみに、ブルニキルドは、ウォルムス Vurmacia に居たこともあった (Fredegarius IV. 40)。やがて抵抗もむなしく、ブルニキルドがクロタリの前に引き出される日がやってきた。彼女には、十人のフランク族の王を殺した罪を着せられる。三日間の拷問の後に、ラクダの背に乗せられて引き回された彼女は、荒馬に肢体を結び付けられ、八つ裂きの刑に処せられた (Fredegar IV, 42)。また、遺骸は焼き捨てられたとも伝えられている (Liber historiae Francorum 40)。613年のことであった。血腥いメロヴィング朝の歴史の中でも、とりわけ酸鼻を極めた事件である。

§ 8 歴史を語るという特権を、歴史家が手放してから既に久しい。しかしグレゴリウスの時代には、歴史家はその特権を十分に享受していた。ちなみに、アウエルバハは『ミメーシス』において、ある諍いの場面を紹介してグレゴリウスの文体を分析しているが、これは、トゥールの司教の歴史叙述の中に「文学」を見出す可能性を示唆したものであろう。ただし、文体分析をより効果的に行うためには、更に劇的な場面が紹介されるべきであった。例えば、前出のジギベルトがルーアンにキルペリクを追いつめた場面である。ここには、この類い希な歴史家の文体の特徴が非常によく現れている。

彼 (= ジギベルト) に聖なる司教ゲルマンは言った。「御出陣あそばしても、弟君をお手に掛けようとなさらなければ、勝者として無事お帰りあそばすでございましょう。しかし、もし害すおつもりがあれば、お隠れになるのは陛



下の方かもしれませぬ。と申しますのも、主がソロモンの口をとおしておっ  
 しゃったからでございます。『汝の兄弟に落とし穴を掘る者は、自らその中  
 に落つ』と。」彼は罪に導かれたので、聞く耳を持たなかった。ヴィクトゥ  
 リアコなる莊園に行くと、全軍が彼の周囲に集められ、彼は丸盾の上に載せ  
 られて王に推挙された。まさにそのとき、女王フレデグンドにより魔法にか  
 けられた二人の召使いが、別の件があるかのごとくに装い、毒が塗られた巷  
 間スクラマサクスと呼ばれている鋭い短剣により、彼の両脇腹を突き刺し  
 た。彼は苦痛の声を挙げて倒れ、間もなく息を引き取った。

(Gregorius IV, 51)

警告を無視し集会の場に出かけ王に推戴されるが、偽りの訴人に耳を傾けて  
 凶刃に倒れるジギベルト。ここから、プルタルコスの筆によるカエサル暗殺の  
 場面を想起しても、あながち大きな見当はずれではあるまい。私には両作家の  
 文体の比較をするだけの力量は持たないが、両者の違いは明らかである。プ  
 ルタルコスは人心と事件を共に描き、グレゴリウスは事件のみを描く。ローマの  
 独裁者の暗殺前後はあわただしかったに違いないが、古典古代の伝記作家は決  
 してあわてない。王への推戴の失敗、不吉な予言と夢、血塗れになってかつて  
 の政敵の彫像の前に倒れる独裁者を見て、おびえ呆然とする人びと。暗殺者た  
 ちとカエサル、そしてその周囲の人びとの行動と心理が、プルタルコスの筆先  
 から手に取るように分かる。それと比べて、中世の歴史家の語り口のなんと不  
 器用なことか。ただしそれだけに、そこには不思議な力感と動感があふれてい  
 る。読者は王を仰ぎ見る司教の姿を見る。王はそのまま水平に移動し、彼を中  
 心に人が集まり、そして「丸盾の上に」super clypeum載せられる。ここまでが、  
 下から上への動きである。ここで突然（直訴を装ったのであろう）男たちが現  
 れ、王は彼らを見下ろす。その直後、王は地面に「崩れ落ちる」conruensの  
 である。原文百語たらずの文字空間の中で、上下移動と水平移動、聖と俗、栄光  
 の頂点と惨めな死、説教、歓呼、恐らく怒号そして悲鳴、これらがめまぐるし

く行き交う。なおかつそこには、司教、王、彼の軍勢（貴族のみならず、無数の兵士も含まれていたであろう）、二人の下手人が往来し、その裏には魔女の姿まで窺える。

この箇所には「なにが？」は記されているが、「どのように？」は記されていない。それにもかかわらず読者には、「なにがどのように」起こったのかがはっきりと分かる。否、「なにがどのように」起こったのかがはっきりしないほど、その場が混乱していたであろうことがこの箇所から分かる、というのがより正確であろう。この司教の文体について論じられる場合は、ほとんど、否定的評価が下される。まことにそのとおりであり、文体の拙劣さは、本人も否定していない。しかし、この騒々しくもあわただしい場面の展開は、彼の文体が有する力により、実に効果的に表現されている。暗殺が繰り返され、そのたびに大騒動が起こるメロヴィング朝の雰囲気表現するのに、これ以上適切な文体は期待できまい。

続いてキルベリクの暗殺場面を紹介する。この王の暗殺は、メロヴィング朝の三つの史書に取り扱われており、それぞれの文体を知るのには格好の材料である。

上述のとおり、グレゴリウスは彼を当代のネロでありヘロデであると断じた上で、次のごとく記している。

しかしある日のこと、彼（＝キルベリク）は夜暗くなって狩りからちょうど帰ってきた。馬から降りようとして召使いの肩の上に手を置いて身を支えていたときに、ある男が近づいてきて、小刀で彼の脇の下を刺し、二度目は腹を突き刺した。そこで多量の血が口と傷口から流れ出し、彼は呪われた魂を吐き出した。

(Gregorius VI, 46)

これに続いて、「おのが腹を神となし」（「ピリピ人への書」3.19）ていたキ

ルペリクの悪行が次々に暴かれる。この箇所は部分的には罵詈雑言に墮しており、どこまでが真実であるか分からない。一方、偽フレデガリウスは、この事件を次のごとく伝えている。

それほど夜遅くなく、キルペリクはパリにほど近いカラという荘園において、ブルニキルドにより遣わされた男により殺された。キルペリクの死は、その無惨な生涯にふさわしかった。

(Fredegarius III, 93)

このように偽フレデガリウスは、ブルニキルドの使囃により暗殺が行われたとする。しかし、これには異説がある。

夜になり、キルペリク王が狩りから帰ってきた。フレデグンドの酒に酔った暗殺者は、王が馬から降り、他の人びとが家に戻ったとき、彼ら自身が刺客となって王の腹に二丁のスクラムサクスを刺して殺した。

(Liber historiae Francorum 35)

『フランク族史書』は、キルペリク殺害の経過を以上のごとく伝えるが、フレデグンドが王の暗殺を決意したきっかけとして、この箇所の前に奇怪な事件を挙げている。すなわち王妃は夫を裏切り、宮宰のランデリク Landericusなる人物と恋仲になった。ある朝、フレデグンドが髪を洗っていると、王が彼女の尻を棒で打った。王妃は行為の主を見ぬままにそれがランデリクであると思ひ込み、「何をやるの、ランデリク」と言ってしまう。フレデグンドは失言に気づき、情夫と共に殺されるよりは夫を殺してしまう方を選んだというのである(同上箇所)。扇情的ジャーナリズムが、いずれの時代にも存在したことを証明する実に興味深い記事である。

ベーゼケ Georg Baeseckeによると、偽フレデガリウスは教養に欠けているの

で、かえって民衆の伝承が詳しく伝えられているという。<sup>(28)</sup> この説の当否は別として、暗殺の黒幕がブルニキルドであると記した点に、偽フレデガリウスの特徴は遺憾なく発揮されている。これは『フランク族史書』についても当てはまり、キルペリク王暗殺にまつわる伝説はかなり豊かに存在していたに違いない。しかも先に引用した三つの箇所のみから想像しても、一つの事件からさまざまな内容の伝説が生じた可能性がある。

ところが『ニーベルンゲンの歌』の文学共同体に先立つこと半世紀の歴史家、フライジングの司教オットーの史書（*Ottonis Chronica* 「『ニーベルンゲンの歌』と時間」注43）の記述は、伝説とは無縁に思える。残念ながら、436年におけるブルグント族の運命についての記述はないが、アッティラの死については、ヨルダーネスを想わせる文体である。フランク族王妃の争いには触れられず、ブルニキルドに与えられた残酷な刑罰は非人間性の報いとのみ記される。

§ 9 以上、いくつかの史書の該当部分を列挙したが、一つの事件について複数の（ときには矛盾する）記述が存在している。むしろ、歴史記述に不統一は当然であるが、少なくともブルグント族の運命と二人の王妃の争いに関しては、差異の幅が広すぎる。史書の記述から推定される「昔の物語」の統一性欠如は、どのように説明されるのであろうか。

この問題に解答を与えるには、中世における歴史意識等に関する十分な知識と考察が前提とされよう。残念ながら、私にはそのような知識は欠けているし、問題に本格的に取り組む意図も能力も有しないのであるが、ニーベルンゲン伝説の枠内では一つの憶測を述べるのが許されるであろう。すなわち、史書記述の孵卵器としての伝説である。

ある事件から「話（はなし）」<sup>(29)</sup> が生じたと仮定しよう。この話は人の心や口に存在し、さまざまな想像・創造が加えられ、あるいは他の人との交流をとおして一定の輪郭を備えるに至る。この段階の話を「伝説」の段階にあると呼びたい。伝説は生きている。伝説段階にある話は、最も印象的な部分としての

輪郭は原則として維持されるものの、種々の状況により内容も形態も自由に変化し、関心の移動により、類似の話を中心に取り込みあるいは分裂して輪郭の一部すら歪める可能性をその本質に含んでいる。もちろん近代になると、伝説が学問的に記録され固定される場合もある。しかし、それは学者の手になる伝説の剥製であり、死んだ標本にすぎない。

伝説という孵卵器の中の話はあらゆる方向に自己増殖する。自己増殖の過程である部分が史書に記述され、それがまた伝説となって新しい記述が生まれる。ただし、事件と記述の間の時間的隔たりが、記述内容に直接反映されるわけではない。『クヴェードリンブルク年代記』とオットーによる史書との記述スタイルの違いは、史家の教養と興味の違いに帰すべきであろう。

史料に拠らず、伝説から史書記述が生まれたとしても、それが不正確であると貶めるのは早計である。中世の史家たちは、事件にまつわる史料の解釈よりも、事件それ自体の解釈に忠実であった、としか私には思えない。彼らは、解釈の加わらない平板な *sein* の世界には耐えられなかったのではあるまいか。「不正確」であるがゆえに、中世は歴史と文学との幸福な共存が可能な時代であり、文学共同体は物語性豊かな「昔の物語」を持てた。もちろん文学と歴史との間には、中世でも截然たる区分がある。常識的に従えば、記録性を重んじるのが歴史であり、芸術性を重んじれば文学となろう。しかしこの区分は、しばしば作者と享受者（情報の発信者と受信者）の意識に依拠し、客観的な基準が設けにくい。この場で基準それ自体について論じるのは、議論のための議論であると私には思える。それよりむしろ、実際の作品について考察を進め、両者の差異が追々明らかになるのを俟つのが賢明である。

議論を「昔の物語」に戻す。ブルグント族の場合、ベルギカなる地名とグンディハリの死は曖昧になった。初期には残った輪郭も、やがて他の伝説との混淆により、曖昧になって行く。部族の敗北と王の戦死はカタラウヌムの戦いと結びつき、それにアッティラまでが参加する。そのアッティラは親の仇として、王の娘に殺される。史書記述のある部分は、明らかに伝説に基づいている。『フ

ランク族史書』に記されたキルベリク王暗殺理由についての、いかにもうがった解釈は、その基礎となった豊かな伝説の存在を想像させる。しかし伝説は、歴史の中でしかるべき文体を与えられて生き続けるのみではあるまい。語り手（あるいは歌い手）によってそれにふさわしい文体を与えられ、文学に昇華した部分もあるはずである。シドニウスの報告は、その可能性を明らかにしている。また歴史と文学の関係を考える際に、グレゴリウスの手になる、ジギベルト暗殺の場面は極めて興味深い。もちろんグレゴリウスは、文学作品を意図したわけではあるまいが、この場面は読み手が文学を意識しうほどの迫力を有しており、それはまた同時に彼自身の文学的才能の豊かさを示唆している。

当時の知識人はブルグント族の悲運について冷淡であったが、それにまつわる伝説は、ブルグント族自身のみならず遠方に住む人びとにまで広まった。メロヴィング朝の時代に、フランク族はブルグント族を併合する。おそらくその過程で、伝説もまた前者に取り込まれたであろうし、おそらく、混乱の中で他の伝承もそれに混じり合ったに違いない。そしてアヴァール族との戦いが継続されるうちに、ブルグント族の悲運に占めるフン族の役割が、大きく意識されるようになった。一方、メロヴィング朝も伝説を生み出す素材には事欠かない。ブルニキルドとフレデグンドの強烈な個性は、ただちに伝説化されたであろう。フレデグンドは、秘薬を操る残忍な魔女として人びとの記憶に残った。ブルニキルドは亡夫の財産のみならず、ガルスウィンタの婚資 *morganegyba* まで手に入れる (Gregorius IX, 20)。おそらくそのような振舞いから、彼女は強欲な王妃であるという、芳しからぬ評判を立てられた。偽フレデガリウスには、求婚の使者として、スペインにいたブルニキルドを訪問したゴゴ Gogo なる男の記事がある。彼女は夫ジギベルトを唆して、ゴゴを殺させたという (Fredegarius III, 59)。この記事は事実と反しているが、王妃が人びとの記憶にどのような姿で留まっていたのか想像するのは容易である。<sup>(30)</sup>

一般的な理解では、この残忍さがブルニキルドをアッティラ殺しの犯人と結びつけるきっかけとなったという。私は、そこまでの楽天的な想像を行う勇氣

を持たない。しかし、とにかく遅くとも偽フレデガリウスの時代（七世紀）には、「昔の物語」は残酷な女性による彩りが添えられていた。そしていつの間にか、彼女の仇は夫から兄弟へと交替してしまった。またフレデグンドは、名前に-gund-という共通部分があることから、北方資料に登場するグズルーン Guðrún (Gundrun) に相当すると考えられている。『ニーベルンゲンの歌』には、プリュンヒルトとクリエムヒルトが、互いに「臣下の妻」、「側妻」と罵り合う箇所がある（第十四歌章）。これは、フレデグンドのかつての身分を反映しているのであろう。

先に仮定しておいた孵卵器としての伝説における再生産過程とおして、徐々に「昔の物語」が形成されていった。それが物語性豊かであった可能性は十分考えられる。

クリエムヒルト、プリュンヒルト、グンテルそしてエッツェルは、歴史の中に痕跡を残している。しかし他の登場人物においても「歴史的」研究がなされてきたので、それを次に簡単に紹介する。

§ 10 ジークフリートのモデルをあえて歴史の中に探るとすれば、アルミニウスもその有力候補であろう。このゲルマン人の指導者は勇敢であるばかりでなく策にも優れ、精強を誇ったローマの軍団を全滅させて、アウグストゥスを嘆かせるほどであった。そして彼は、「近親者の奸計により倒された」後にも、「いまだ蛮族たちの間で歌い継がれ」ており、更には「(アルミニウスは) 疑いもなくゲルマニアの解放者」liberator haud dubie Germaniaeという、ローマ人側からの賞賛すら存在する。<sup>(31)</sup> また彼の部族は、ジークフリートと共にしばしば言及される鹿と、少なからざる関係があるという。これ以外にも、ジークフリートのモデル探しは数多く試みられた。メロヴィング朝時代に暗殺されたSigi-を名前の前半部に持つ何人かの王は、当然その候補に挙げられている。もし二人の女王たちの争いのモデルが、カエサリアのプロコピオスの伝える東ゴート族の事件であるとするれば、それに巻き込まれて命を失ったウラヤ Οὐραϊαςな

る将軍（東ゴート族の王の甥）も英雄のモデルとなるであろう（『ゴート戦争』Ⅲ, 1, 37頁, グリム『ドイツ伝説集』385）。更には、クサンテン（ジーフリト誕生の地！）の近傍で殉教したヴィクトルViktorから、Sieg-の部分を連想する説すら存在する。

このようにいくつかの例に限っても、実在の英雄と伝説の英雄を結びつける状況証拠が、豊かに残されていることが理解されよう。しかし状況証拠は、いくら積み重ねても状況証拠にしか過ぎない。また、これだけ多数の英雄のモデル候補が存在するという事実から、逆に、モデルを個ではなくて、普遍と関連づけようとする傾向が生まれても不思議ではあるまい。英雄と神話との結びつきは、既に古典的議論である。しかしギリシアの英雄たちとは異なり、ジークフリートの場合、歴史的なるものの存在も無視できない。神話と歴史を結びつけて総合的な英雄像を描こうとしたのが、ヘーフラーOtto Höflerの貢献である。彼の論文、とりわけSiegfried, Arminius und der Nibelungenhort<sup>(32)</sup>は、この傾向の業績の集大成の感があり、当分の間、他の追随を許すまい。ただし、それが事実在即しているか否かは別問題である。この点に関しては、ベックHeinrich Beckの立場が最も公平であろう。<sup>(33)</sup>

ハゲネはジーフリト暗殺者として、またフン人と戦う勇士として作品中極めて重要な役割を演じており、伝説のおそらくもっとも深い層に位置する人物の一人である。<sup>(34)</sup>ところが彼についても、その歴史的対応人物が明確ではない。諸説ある中で、ハゲネをフランク人とする主張とローマ人とする主張が大きな二つの傾向である。<sup>(35)</sup>これらの説はまことに興味深いのが、文学研究とは関連が薄いので本論文においては紹介しない。ローマ人であれフランク人であれ、伝説上の彼の像がメロヴィング朝時代の陰惨な宮廷陰謀の数々により影響を受けたことは間違いのないであろう。

このように、ジーフリトとハゲネのモデル探しは単なる憶測の域を出ない。なるほど登場人物とそのモデルの間にはいくばくかの関連がある。もちろんそれは当然で、§2において既に指摘しておいたとおり、最初からそのような人



物がモデルとして選ばれているからなのである。

既に先進により、歴史から文学への道筋について非常に精緻な理論が展開されている。その中でおそらくローゼンフェルトの説<sup>(36)</sup>が最も明快である。しかし彼の説にしても、弱点もあり異論を許す余地は大いにある。例えばマッケンゼンは、伝説の混淆の複雑さとヒルディコという名の非ゲルマン性を手がかりにして興味深い議論を展開している。<sup>(37)</sup>

このように議論は尽きないが、新しい資料の発見でもないかぎり、歴史的資料からこれ以上の成果を求めるのは無理である。かつまた、統一性の欠如は、ジークフリートやハゲネの場合にも存在する。この点を確認して、次に「昔の物語」と文学作品との関係を探る。

[以下次号]

## 注

- (1) 『『ニーベルンゲンの歌』と共同体』早稲田大学政治経済学部『教養諸學研究』116～118号, 2004～05年, 『『ニーベルンゲンの歌』と時間』同119号～120号, 2006年, 『『ニーベルンゲンの歌』と予型論』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第51輯, 2006年。
- (2) 『『ニーベルンゲンの歌』と共同体』§2および§16等。
- (3) 歴史上の事件として取り扱うときは、「ローマ人」などの例外を除き、「ゴート人」ではなくて、「ゴート族」と表記する。その他の部族の表記についても同様である。表記は簡潔を旨とするが、格語尾や音引きの有無については、分かりやすさと慣例を重んじた。また、異形が存在する場合は、適宜代表形を用いる。
- (4) たとえば *Iordanis Getica*, LVII (290) などに、それは明らかである。
- (5) 『ベーオウルフ』では、英雄が戦いの経過を物語る前に、勝利の讃歌が作られている。「それゆえ、詩人は英雄の事績の讃歌を作るのに、実際の事実経過についての情報を必要としない」(H.Beck: RGA, s.v. Held, *Heldendichtung und Heldensage*)。
- (6) 一般的認識に従い、375年のフン族の東進開始と568年のランゴバルト族による上部イタリア征服の間の期間を、ゲルマン民族の移動期とする。Vgl. See 1971, S.9 usw.
- (7) *Ammiani Marcellini rerum gestarum libri qui svpersvnt*. Edidit Wolfgang Seyfarth, adivvantibus Liselotte Jacob-Karau et Ilse Ulmann. Vol. II. Leipzig (Teubner) 1978. [以下, *Ammianus* と略記]. 引用文中 *pubis* を「力強い」と訳したが、「成人男子の」かもしれない。

- (8) *Prosperi Tironis epitoma chronicon*. In: *Chronica minora saec. IV. V. VI. VII. volumen 1*. Edidit Theodorvs Mommsen. MGH AA 9. Berlin (Weidmann) 1892 [以下, **Prosperus と略記**], S.341-499, S.475f. *Cassiodori Senatoris chronica*. In: *Cassiodori Senatoris Variae*. Recensvit Theodorvs Mommsen. MGH AA 11. Berlin (Weidmann) 1894 [以下, **Cassiodorus と略記**], S.109-161, S.156.
- (9) *Hydatii Lemici Continvatio chronicorvm Hieronymianorum*. In: *Chronica minora saec. IV. V. VI. VII. volumen 1*. Edidit Theodorvs Mommsen. MGH AA 11 Berlin (Weidmann) 1894, S.1-36 [以下, **Hydatius と略記**], S.22f.
- (10) *Chronica Gallica*. In: *Chronica minora saec. IV. V. VI. VII. volumen 1*. Edidit Theodorvs Mommsen. MGH AA 9. Berlin (Weidmann) 1892 [以下, **Chronica Gallica と略記**], S.629-666, S.660.
- (11) *Gai Sollii Apollinaris Sidonii epistvlae et carmina*. Recensvit Christianvs Luttjohann. MGH AA 8. Berlin (Weidmann) 1887. [以下, **Sidonius と略記**].
- (12) Mackensen 1984, S.47.
- (13) この箇所から『ゲルマーニア』第三章の、いわゆる *barditum/baritum* を連想することは許されるであろう。
- (14) *Leges Burgundionum*. Edidit Ludovicus Rudolfus de Salis. MGH LNG 2, 1. Hannover (Hahnsche Buchh.) 1892, S.43. この法典の成立年代には諸説あり一意的に定めがたい。名称は通例に従う。なお *Gibica* と *Nibelung* の関連についてはローゼンフェルトの興味深い考察がある (Rosenfeld, Helmut: RGA s.v. Burgunden)。
- (15) *Gregorii episcopi Tvronensis libri historiarum X*. Editionem alteram cvraverunt Brvno Krvsch et Wilhelmvs Levison. MGH SRM 1. Hannover (Hahnsche Buchh.) 1951. [以下, 『歴史十書』ないし *Gregorius* と略記]。
- (16) この場合、「フン族」よりも原文どおり「スキタイ人」が名称としては適当であろう。彼らはフン族とゴート族、あるいは他の部族の大集合体であったからである。Ex *Historia Gothica Prisci rhetoris et sophistae*. In: *Corpus Scriptorum Byzantinae vol.VI*. Editio endatior et copiosior, consilio B.G. Niebhrii C.F. Pars 1., Bonn (Weber) 1829 (Rpr. Michigan 1988), S.139-228 [以下, **Priscos と略記**], S.190.
- (17) Vgl. Homeyer, H.: *Attila. Der Hunnenkönig*. Berlin (de Gruyter) 1951, S.179.
- (18) *Prosperus* S.482f.; *Cassiodorus* S.157.
- (19) *Marcellini V.C. Comitis chronicon*. In: *Chronica minora saec. IV. V. VI. VII. volumen 2*. Edidit Theodorvs Mommsen. MGH AA 11. Berlin (Weidmann) 1894, S.36-109 [以下, **Marcellinus と略記**], S.86.
- (20) デ・ボーアはヨーロッパ西部においては、カロリング朝時代までアッティラの死は知られていなかったと述べているが、これはやや早計に過ぎる結論であろう。正しくは、彼の死について記述してある文献が現存しないと考えるべきである。de Boor, Helmut: (1932) 1963, S.21.

- (21) *Poetae Saxonis annales de gestis Caroli magni imperatoris*. In: *Annales et chronica aevi Carolini*. Edidit Georgivs Heinrichvs Pertz. MGH SS 1. Hannover (*Hahnsche Buchh.*) 1826, S.225-279 [以下, *Poeta Saxo* と略記], S.247.
- (22) *Annales Quedlinburgensis*. In: *Annales, chronica et historiae aevi Saxonici*. Edidit Georgivs Heinrichvs Pertz. MGH SS 3. Hannover (*Hahnsche Buchh.*) 1839, S.22-69 u. 72-90, S.32.
- (23) *Pauli Historia Romana*. Recensuit et emendavit H. Droysen. MGH SRG (in us. schol.) 49. Berlin (*Weidmann*) 1879, S.112.
- (24) ゲットナー=アーベントロート Heide Göttner-Abendrothのごとく、ブリュンヒルデを大地母神の一つの相と考えるのも現代的であろうし、ある部分では正しい。ただし、もしそうであるとすれば問題が拡散してしまい、ニーベルンゲン伝説がニーベルンゲン伝説ではなくなってしまう。彼女の名は歴史上の人物と結びつけるのが適当であろう。Vgl. *Die Göttin und ihr Heros*. München (*Frauenoffensive*) 1990, S.211ff. なおゴート族との関係は§21において述べる。
- (25) 中世の書物の常であろうか、固有名の綴りも一定していないので、一応の標準的な形を挙げた。音写に際しては厳密さよりも分かりやすさを旨とし、原則として音引きは行わないのは既述のとおり。以下に、この時代の史書からいくつか引用するが、そこにおいても綴りは混乱している。したがって混同を避けるため、同一人物については原則として『歴史十書』の綴りに倣う。
- (26) この箇所 *malificati a Fredegundae regina (Gregorius IV, 51)* は「女王フレデグンドにより魔法にかけられた」の意味であろう。
- (27) *Chronicarum quae dicuntur Fredegarii Scholastici libri IV. cum Continuationibus*. In: MGH SRM 2. Hannover (*Hahnsche Buchh.*) 1888, S.1-193 (214) [以下, *Fredegarius* と略記]; *Liber historiae Francorum*. In: MGH SRM 2. Hannover (*Hahnsche Buchh.*) 1888, S.215-328, [以下, *Liber historiae Francorum* と略記]。
- (28) *Baesecke, Georg: Vorgeschichte des deutschen Schrifttums. Erster Band der Vor- und Frühgeschichte des dt. Schrifttums*. Halle a.S. (*Niemeyer*) 1940, S.130.
- (29) 「話」とは曖昧な語であるが、定義のための議論は本論文の主題から外れるので、無定義のまま用いる。なお、この問題については、川田順造の著作『口頭伝承論』(河出書房新社1992年)所収の諸論文における考察が興味深い。
- (30) ベーゼケは前掲書において (S.127, 249, 288) ゴゴをジーフリトのモデルと考えているが、彼の見解にはさしたる根拠は存在しない。
- (31) *C. Suetoni Tranquilli Divius Augustus*. Ed. by Evelyn S. Shuckburgh (*New York* 1979) Cambridge 1896. p.52; *The Annals of Tacitus*. Ed. by F.R.D. Goodyear. Vol. II. p.60. (*Lib. 2, 88*). ジークフリート=アルミニウス説は、いまだ *Kontinuität* の問題やイデオロギーと切り離して考えられず、まことに議論しにくい。私たちはむしろこの現状を憂慮すべきであろう。
- (32) *Höfler, Otto: Siegfried, Arminius und der Nibelungenhort*. Wien (*Verl. der Österr. Akad. der*

Wiss.) 1978 (Österr. Akad. der Wiss. Philos.- hist. Klasse Sitz.-ber. 332).

- (33) Beck, Heinrich: Zu Otto Höflers Siegfried-Arminius-Untersuchungen. In: PBB (Tübingen) 107, 1985, S.92-107. Ders.: RGA, s.v. Held, Heldendichtung und Heldensage (注5に同じ).
- (34) これは諸家の認めるところであり (例: Heusler (1921) 1973, S.6), それ自体を否定するものではない。ただし、彼の役割が時代と共に大きく変化したことには注目すべきであろう。これについては、次号において論じる。
- (35) ハゲネの出身地とされる Tronege の解釈が、両説の分かれ目となるようである。すなわち、この地名はトロヤまたはトラヤヌスを連想させ、それが研究者たちの想像力を刺激したのであろう。Vgl. Mackensen 1984, S.41f.; Roethe 1909, S.668. usw.
- (36) Rosenfeld, Helmut: RGA s.v. Burgunden.
- (37) Mackensen 1984, S.55f.